

聖書：ヨハネの黙示録 14：1～5

説教題：十四万四千人の歌

日時：2021年6月6日（朝拝）

ここしばらく、地上の教会が置かれる厳しい状況について語られて来ました。キリストの十字架と復活によって決定的に敗北し、地へ投げ落とされた竜すなわち悪魔は激しく怒って教会を迫害することへ向かったことを 12 章後半以降見て来ました。悪魔は天に上って、この世界を思うように支配しようとする野望はもはやかなわないこととなり、むしろ自分の時間が短いことを知って、できる限り神にダメージを与えようとして地上に残されている教会への攻撃に集中します。その際、竜は一人では戦わず、第一の獣と第二の獣を用いることが 13 章に言われました。第一の獣とはこの世の国家権力のことであり、第二の獣はその国家権力を拝むように人々を惑わすサポーター、偽預言者のことです。その結果、教会は厳しい中に置かれることが言われて来ました。13 章 7 節に「獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つ」と言われました。15 節では、獣の像を拝まない者、すなわち皇帝礼拝に屈しないクリスチャンたちは殺されると言われました。また 17 節に、獣の刻印を持っていない者、すなわち皇帝礼拝に屈さないクリスチャンたちは物を売り買いできない状態にされる、すなわち社会からはじき出され、村八分とされ、生活もままならない状態に追い込まれるとありました。こういう苦難の日があると言われました。

しかし今日の 14 章でヨハネに新しい幻が示されます。すると見よ！と記されます。今度ヨハネが見させられたのは「子羊がシオンの山の上に立っていた」という光景でした。この子羊とは、これまで見て来た通りイエス・キリストのことです。13 章 11 節には第二の獣が子羊に似た姿で登場しました。偽りの子羊です。それに対してこちらはまことの子羊です。またその子羊とともに 144,000 人の人たちがいたのをヨハネは見ました。この 144,000 人はすでに 7 章 4 節に出て来ました。一言で言えば旧約と新約を貫く神の民全員を象徴する表現です。7 章 5～8 節では 12 部族がそれぞれ 12,000 人ずつで、計 144,000 人と言われていました。これはイスラエル 12 部族のイメージで神の民を象徴し、その強調のために 12 をかけ、さらに多数を意味する 1,000 をかけた数字と見ることができるかもしれませんが、あるいは旧約のイスラエル 12 部族と新約の 12 使徒をかけ、それに 1,000 をかけたものと見ることができるかもしれません。その神の民全員も子羊と一緒にいたのです！

さて子羊が立っていたシオンの山とはどこにあるものなのでしょうか。シオンとは神の都エルサレムを表す別の表現です。ということはこの地上にあるエルサレムの山の上にキリストが立つということなのでしょう。キリストはやがてその山に再臨されるということなのでしょう。ある人はここをそのように読もうとしますが、前後関係を見ると、そうは言えません。子羊とともにいる 144,000 人について 3 節に「御座の前」で歌ったとあります。「御座」は天にあります。またその後「四つの生き物および長老たちの前で」ともありますが、これらは天使的存在で天にいたことがこれまで言われて来ました。さらにその後 144,000 人を指して「地上から贖われた」と言われています。ですからこのシオンの山は地上ではなく、天にあるものと考えられます。

この「シオンの山」を考える上で、次の二つのみことばが参考になります。一つは詩篇 2 篇 6 節。そこに「わたしがわたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山シオンに。」とあります。神はやがてシオンの山に救い主を王として立て、その王のもとで民を守ってくださると言われていました。その山は民にとって安全なところであり、救いを意味する場所です。もう一つはヘブル人への手紙 12 章 22 節。そこに「しかし、あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い、云々」とあります。ここにシオンの山が「生ける神の都である天上のエルサレム」と並べて語られています。そこに信仰者たちは近づいていると言われています。そのシオンの山に神の民の全員がいる様子をヨハネは見たのです。

その 144,000 人の額には子羊の名と子羊の父の名が記されていました。前の 13 章 16 節に、獣に従う者たちの右の手あるいは額に獣の名またはその数字が刻印されていたとあったのと対照的です。この神の民に与えられるしるしはすでに 7 章 3 節に出て来ました。そこでは最初の 4 つの封印が解かれる前に、すなわち様々な災いや困難が地上に臨む前から、神はご自分の民をご自分のものとして印づけ、守ってくださるため、この印を押されたと言われていました。その印とは「子羊の名と子羊の父の名」、すなわちキリストと父なる神の名であったことが今日の箇所から分かります。その印を受けた者たちがこの時、天で、シオンの山に立つ主とともにある光景をヨハネは見させられました。このように見るとここにあるメッセージははっきりして来ます。そ

れは神の民は 12～13 章で見た様々な困難の中を通りますが、このように守られて必ず最終的な救いに至るということです。そして注目すべきは一人も欠けないということです。7 章 5～8 節で神の民が 144,000 人という数字をもって象徴された時、そこには神が一人一人を数えておられ、彼ら一人一人を良くご存知であられるというニュアンスが含まれていました。そこで 144,000 人と数えられた彼らが、この 14 章で一人も欠けることなく、救いの山に立つ子羊とともにいました！10 万人くらいまで減ってはいませんでした。あるいは 1,000 人減って 143,000 人になっていたというのでもありません。印をつけられた 144,000 人がそのまま、神が立てた救い主のもと、天のエルサレム、神の祝福の都にいたことがこうしてヨハネに示されたのです。

続いてヨハネは 2 節で天からの声を聞きました。これは 3 節に記されている 144,000 人が歌った新しい歌のことと考えられます。新しい歌とは、旧約時代に神がイスラエルを敵から救い、新しい勝利を与えてくださった時にイスラエルによって歌われた感謝と賛美の歌を指すものです。ここではキリストがくださった最終的勝利を感謝して、彼らは新しい歌を歌っています。それは地上から贖われた者のみが歌うことのできるものと言われています。そのことは良く分かると思います。たとえ今ある賛美歌を一般の多くの人々が歌うことができても、その歌詞を味わいながら、深い感動をもって自分の告白として歌うことができるのはクリスチャンのみです。ここに「贖われた」という言葉がありますが、これは一言で言えばキリストの十字架の死による救いを指します。キリストは私たちが罪のさばきと滅びから救い出すため、ご自身の尊い命を代価として支払ってくださいました。その大きな犠牲を通して、この方により頼む私たちは救い出されました。この歌は自らの罪の深さに恐れわななき、ただキリストの身代わりによる救いを体験した人のみが心から歌えるものです。その賛美の声が、2 節にあるように、大水のとどろきのようであり、激しい雷鳴のようであったということでしょう。数え切れない人々の心からなされる賛美ゆえに、それは非常に大きく、力強い声であった。しかしその後「しかも、私が聞いたその声は、豎琴を弾く人たちが豎琴に合わせて歌う声のようであった」ともあります。豎琴とはハープのようなもののことです。つまりそれは力強いけれども同時に美しいものでもあった。やかましい音ではなく、優美で聞く人を魅了するような声であった。愛と感謝にあふれる賛美は、このようなものとして響き渡ったということでしょう。

最後 4～5 節には、この神の民、144,000 人の特徴がいくつか述べられています。5

つのことがあるかと思えます。一つ目は「この人たちは、女に触れて汚れたことがない者たちで、童貞である。」 初めて読むとびっくりするかもしれませんが、黙示録は主に象徴的表現で語られています。旧約聖書で神と神の民の関係は結婚関係になぞらえられ、偶像礼拝を行うことは靈的姦淫と見られました。ですからこの意味は、144,000 人は偶像礼拝あるいは皇帝礼拝に屈しなかった人々であるということです。ここで「女に触れたことがない者たちで、童貞である」と男の立場で語られているのは、このあと 17 章で靈的な姦淫、偶像礼拝へと誘う「大淫婦」と呼ばれるものが出て来るからでしょう。そのような淫婦に心奪われず、キリストへの靈的純潔を保った者たちという意味で、ここは語られていると考えられます。

二つ目は「彼らは、子羊が行く所、どこにでもついて行く。」 これは今見た一つ目のことを積極的・肯定的に語ったものと言えます。彼らはただキリストの声にのみ聞き従い、キリストのみについて行く。ヨハネの福音書 10 章 3~4 節：「羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。」

三つ目は「神と子羊に献げられる初穂」。「初穂」はその後に続く本格的な収穫の前触れという意味でしばしば使われますが、ここでは特にそのことは考えられていないようです。なぜならここでの「彼ら」すなわち 144,000 人は旧約と新約を貫く神の民全員を意味するからです。その後に続く人たちがいるわけではありません。聖書の中には、このように後に続く何かを考えに入れず、「特別に主に属する聖なるもの」という意味で「初穂」という表現が用いられる場合があります。ここでもその意味であると考えられます。彼らは、その後に記されているように「人々の中から贖い出された」という意味で神と子羊に献げられる初穂なのです。

四つ目は「彼らの口には偽りが見出されなかった。」 これはキリストご自身が、その口に決して偽りが見いだされなかったと言われているように、その子羊キリストについて行く者たちも、その方を映し出すような者となるということかもしれません。「わたしが、道であり、真理であり、いのちなのです」と言われた方に従う者たちとして、真理のみを語る者たちとされるということです。あるいはここに「福音の忠実な証し」という意味があるのかもしれませんが。迫害の中でも偽らず、ごまかさず、主

への信仰告白を堅く保ち、真実に証言し続けた者たちという意味で。

そして五つ目に「彼らは傷のない者たちである」と言われています。神にささげられるものは傷のないものでなければならないことが旧約聖書に示されています。この144,000人は神の前にそのような者たちであるということです。もちろん彼らはもともと罪のない者たち、全く欠けのない者たちだったわけではありません。しかしキリストによって聖められ、キリストについて行き、キリストに導かれて、今や神の前にそのように受け入れられる傷のない者とされて立っている！ということです。神によって守られ、天で賛美している144,000人は、ただ神にそのように守られる人々というだけではなく、このような特徴を持つ人たちでもあったということです。

最後の救いの完成の日まで教会は戦いの中にあります。前の章で見た二つの獣を用いたサタンの迫害は、後の日までであると聖書は語ります。そんな中、私たちは今日の箇所でもヨハネが見た幻を霊の眼にいつも焼き付けておきたいと思います。たとえ教会がどんな中を通らせられようとも、まことの子羊が、神が約束されたシオンの山の上に立っておられる。そしてそこに144,000人の神の民もともにいる。一人も欠けることはありません。神とキリストの名を額に記されている者たちとして、最後の日まで守られるのです！それゆえ、揺さぶられることなく、たじろぐことなく、心騒がせることなく、このまことの子羊こそを見つめ、この方にこそ信頼し、この方の御言葉にこそ耳を傾け、この子羊の行くところにはどこにでもついて行く者たちでありたいと思います。その人はこの子羊によって養われ、子羊から学び、子羊にならい、子羊を映し出す者とされて行きます。そしてその方がくださった大いなる救いと勝利を心から感謝して、御座の前で、四つの生き物と長老たちの前で、大水のとどろきや激しい雷鳴のような大きな声で、しかしハープのような優しく美しい声で、新しい歌をもって賛美する者たちへと導かれる。その日を見つめて、その日に至るまで、キリストの贖いの恵みをいよいよこの身に味わいながら学びつつ、神とキリストにすべての栄光を帰し、そこに自らの最大の喜びを見出す神の民、144000人の歩みへ導かれたいと思います。